

〔論文〕

いのちの輝き

葛井 義 憲

名古屋学院大学名誉教授

要 旨

人々は生きる世界が少しでも希望にあふれ、日々、喜びをもって明日へと向かう歩みができることを求める。ともに同じ時代を生きる仲間たちと、認め合い、支え合い、助け合って過ごすことを望む。しかし、自らの生を肯定し、受容し、苦難と対峙して、それに立ち向かう逞しさを持ち続け、足を進めることはなかなか至難である。しかも、人々の悲哀や苦悩は本人の成育歴、家庭環境などから生じるだけでなく、その存在を取り巻く時代環境、社会のあり方、また、それらから表れ出る人間観、世界観などからも生じてくる。本稿では、人々の望みが実現することを願って励む教育者の教育活動を見つめ、彼らがよって立つ人格教育の意義とそこへと立ち向かわせる「思想の構築」とその「実践」を分析し、記述する。

キーワード： いのちの輝き、北海道家庭学校、無用な存在、聖書、谷昌恒

Brightness of Life

Yoshinori FUJII

Nagoya Gakuin University

発行日 2019年2月28日

はじめに

いのち生える地球に暮らす私たち人間は木々のささやき、野の花々の凜とした美しさ、鳥や虫たちの鳴き声、動物たちの引き締まった身体から表される躍動などにしばしば触れる。そしてそれら一つ一つのいのちに思いを馳せる。そこから浮かび上がるものは、これらすべてのいのちは尊く、決して無残に踏みにじられるべきものではない。しかしこれらいのちに囲まれ、交流するなかで、今生きる「我」の存在と日々の生活のあり方に対して問いが生じてくる。

その問いを発する者の一人に、イエスがある。彼は我々に語る。「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。」(マタイによる福音書 6:26) と。この語りかけの背後に、過酷な自然環境の下で日々懸命に生きる鳥たちをも見守る神の愛があることを知らせる。また、一つ一つのいのちの側から表される神に対する信頼も告げる。

イエスは人生のほとんどを過ごしたガリラヤの地の木々や花々に囲まれ、空を飛ぶ鳥たちの姿を見つめ、ガリラヤ湖で泳ぐ魚たちを見つめて、遊行する。その遊行の日々は、貧しさの中で精一杯毎日を生きる人たちとの触れ合いである。そして彼らとの交わりの下から表れ出る言葉や業(わざ)の底に、いのちを与える創造主との強い結びつきと神の愛への揺るぎない信頼がある。

こうした愛の神と固く結ばれつつ、遊行するイエスの言行に触発された者たちの中から、教育活動に挺身する人たちが各時代、各所に、表れ出た。この日本にも現われた。

小論では、北海道を主たる舞台として、教育活動に励む留岡幸助、谷昌恒を取り上げ、考察し、いのちの輝きに魅せられて尽力する様態を記す。

1. 教育活動

他者から注目され、賞賛されることから縁遠い営みの一つに教育活動がある。しかし、「陽の当たらない状況」であることを弁えながらも、この近・現代日本の教育界にも、一人ひとり子どもたちと向き合い、心を通わせ合い、子どもたちが育ちゆく事実を見つめ、彼ら一人ひとりの内に秘められた能力が開花することを祈り、彼らに生きることの素晴らしさを、彼らが有す人格の価値を、そして自らと他者を愛することの意義深さを語り、伝える教師は少なからず存在した。また、今も存在する。

筆者が本学の書籍出版の援助で上梓した『闇を照らした人々』(新教出版社、1992年)の中で取り上げた長野県南安曇郡で教育活動を行った研成義塾校長、井口喜源治もまたその一人であった。彼は聖書を教育活動の基本に据えて、ともに席を並べるお互いが認め合い、受け入れあうエネルギーとなりえる「家庭的情味(研成義塾設立趣意書の中の「第一」に、「吾塾は家庭的ならんことを期す」と記されている)」を重要視して、豊かな人格教育、生徒たちの個性の伸長に取り組み、子どもたちの

成長発達を無上の喜びとして働いた人物であった。

こうした教師たちの地道だが、人間愛に満ちた教育実践の「財産」を私たちは持ちながらも、私たちは心のどこかで「衣食足りて礼節を知る」との考え方にとらわれ続けてきた。また、科学技術は「万能」であり、その発展・進歩は「優れた人格や豊かな心」をも有す人間を「生み出す」のではないかとの「希望」もひそかに抱き続けてきた。しかし、現実はいかがであろうか。私たちは豊かな物質生活、快適で、便利で、効率のよい生活環境を手に入れた反面、いのちを軽視する出来事（自殺・いじめ、環境破壊など）に直面し、他者を愛し、他者の痛み心に心を寄せ、思いやる「あり方」を少しづつ喪失しだしているかのように思われる。また、困難と向き合い、それらとの「格闘・克服」を忌避する事態も広がろうとしている。

教育には、時間も愛情も労力も希望も限りなく必要である。また、この世には「捨てるべきいのち」などないとの確信と、それを具現化する利他愛の地道な教育活動も求められる。

健全なる精神は物質の豊かさや快適な生活環境だけでは培われない。この世に生きるすべての人々、大人も子どもも自らのいのち及び他者のいのちを尊び、さらに、自らの魂を育む努力、つまり、深き省察と真摯な祈りと利他愛の「実践」も必要とされる。また、一人ひとりの人格や能力を尊重し、違いを有すそれぞれの存在を認め合う「大きな心」も求められる。

私たちは近・現代教育の中で「欠いてしまったもの」の一つ、「魂・心・いのち」の重要性に気づき、それらを尊重し、そしてそれらを育む教育が殊の外、大事なものだと思われられる。しかしこれをして為すにあたって、時間や愛情をかけ、弛みない研鑽に努めるこの取り組みは、はじめ「焼け石に水」の如き「成果」もあげられないかもしれない。しかし、そうだからと言って、私たちは手をこまぬいで、「ひび割れた」現状を放置しつづける訳にはゆかない。たとえ、この地道な働きが「焼け石に水」の如きものであったとしても、一人でも、二人でも、三人でも、地道だが、この「魂の育み、いのちの成長」教育実践に参加するならば、現状は徐々に変えられていくはずである。そしてこの教育実践は学校だけでなく、家庭にも、地域社会にも、国にも強く求められることである。

2. 北海道家庭学校

いのちの輝きにうたれ、この世に捨てられるべきいのちなどないのだとの信念に生きた教育者の一人に留岡幸助がいた。留岡は1891（明治24）年、北海道空知集治監で教誨師として勤務して以来、少年の「感化教育」に大きな関心を寄せつづけた。それは「集治監（＝「監獄」）の在監者」が「其幼少にして十中七八まで不良少年であった」との「事実」から生じるものであった。それ故、彼は社会から少しでも犯罪が減少していくために、これら「非行少年たち」をペスタロッチ（J. H. Pestalozzi）が提唱する「家庭の神聖と家庭の感化」をもって育てる（三並良著『日本に於ける自由基督教と其先駆者』文章院出版部、1935年）、つまり、「家庭的情味」のもとで教化薫育することの意義を知らされたからである。彼は日々接触する「非行少年たち」の成育歴から、彼らは「温かな家庭」での成長

とは「縁遠い処」にあって大きくなっているとの「事実」を見つけ出した（『留岡幸助著作集』第4巻同朋舎出版、1980年）。そして1899（明治32）年、最初、東京の北豊島郡巢鴨村に「家庭学校」を創設し、次に、1914（大正3）年には、北海道紋別郡遠軽の原野を拓いて、「北海道家庭学校」を開設した。

こうした集治監での教誨師としての働きや「非行少年たち」への感化教育に向かわせる原動力は彼のキリスト教信仰と幼少年時代のある体験によるものであった。彼は同志社在学中（1885年～1888年）から、「光は暗きに照り」（ヨハネによる福音書1:5）との聖句に捕えられ、社会の「暗黒面（留岡はそれを「監獄」と「遊郭」のうちに見た）」での働きを畢生の仕事としたいと望んだ。そしてこの「暗黒面」への傾斜の発端は彼の故郷、岡山の高梁にあった。

留岡は1864（元治元）年、高梁に誕生し、誕生後すぐに同地の米屋、留岡金助の養子として貰われていった。この養家で、彼は順調に育っていったが、明治を迎えた1872（明治5）年のある日、寺小屋へと通う幸助は士族の子どもと喧嘩をし、その子の腕に歯形が残る「傷」を負わせた。翌日、養父金助は士族屋敷に呼ばれ、幸助に対する監督不行届きをなじられ、米屋金助の出入りを差し止めると言い渡された。この体験を通して、幸助は「四民平等」となった世の中に、いまだ、封建遺習が根強く存続していることを痛く知らされた。

このような「理不尽さ」に疑念を抱きつつ成長する幸助は1880年、「西洋の軍談講釈」を聞こうとして、キリスト教の説教会場へ赴いた。その日、説教者は次のように語った。

此宇宙には独一真神と謂つて神様がある。此神様の前には士族の魂も平民の魂も同一の価値を有して居るのである（『留岡幸助著作集』第3巻同朋舎出版、1979年）。

士族の平民に対する「凌辱」を納得し難いと思いつづけた幸助は「独一真神」の前では「士族の魂も平民の魂」も「同一の価値」あるものだと聞かされ、感激した。そしてこの神の前での「平等」という福音が「町人の子」幸助に不平等・不条理に苛まれる「暗黒面」で働くことを促していった。彼は1882（明治15）年7月、高梁教会で受洗した。

一つの体験と信仰が留岡の行くべき「世界」を示し、そして彼を大きく成長させた。彼は「慈善事業」を行うにあたって、無欲の人でありたい、と言う。他者のために自らを徹底して捧げ尽くす待望に燃えたい、と望む（『留岡幸助著作集』第1巻同朋舎出版、1978年）。そして報いを望まず、他者に与えつづけたイエスの弟子、留岡に、この世に「不要で、捨ててよい人間などない」のだとの確信を持たせた。また、神からののちを与えられた人間が不当に扱われ、滅ぼされることは一に社会の損失であり、それらのいのちが育てられ、生かされることが大いなる「国益」であるとの確証を「少年感化事業」を通して固めていった（谷昌恒著『教育力の原点』岩波書店、1996年）。

北海道家庭学校第5代目校長、谷昌恒はこの留岡の情熱と人間理解を受け継いで、教育活動を行っていった。彼は「運命愛」という言葉をしばしば用いる。それは以下のように表わされる。

[私たちは公平であること、平等であること、もとより願わしく、正しいことだと思ふのです。

しかし、]世の中は不公平で、不平等にできているのです。この世に生きていくことは、その不平等に耐えていくことだと私は思うのです。

不公平とか不平等とかいいますが、たったひとつの事実は、人間はひとりひとりが違うということだと思うのです。ひとりひとり違う事実にたいして、なんらかの尺度を持ち出して、高いとか低いとか、美人とか不美人とかいうにすぎないのです。生きるということは不平等に耐えることだといえ、いかにも非情な主張のように受け取られるかもしれません。しかし、不平等に耐えるということは、じつは、人間はひとりひとり違うのだという事実を、そのまま受け入れることなのです（同書）。

谷は厳しい生活環境の中から北海道家庭学校へ送られてきた少年たち、ここを卒業した後も、世の中の差別やいやがらせを体験しなければならない少年たちに、社会に存在する「不公平・不平等」について語り、しかも、それを受け入れて、懸命に歩みつづけよと述べる。そして彼は北海道家庭学校を取り囲む多くの木々や草花を眺めながら、次のように少年たちに語りかける。

こうやって窓から外を見て、木が一本一本美しいと思う。なぜ美しいのか。ある日、種がフーッと飛んできて地面に落ちる。落ちたところに木は根を張って、そして天に向かって伸びていく。木だって、俺はもっと陽あたりのいいところにいきたいな、もっと風通しのいいところにいきたいな、こんな湿気地まっぴらごめんだと思うかもしれないけれど、木の一本一本はある日、種が落ちたところにいっしょうけんめい根をおろして、天に向かって伸びていく。枝ぶりよく天に向かって伸びていくのはカッコいいさ。カッコいいけれども、枝を張って天に向かって伸びていくのと同じ努力を、目に見えない地下に向かっていっしょうけんめい根を張っていく。見てごらん、天に向かっていく、あの成長と、おそらくそれに倍する努力で地下深く、より深く根を張っていく（同書）。

谷は大地（＝環境）を選ぶことのできない木々の成長、天に向かい、地下に深く向かう枝と根を題材にしつつ、子どもたちの生活環境、社会環境や厳しいそれらに向かう心構えを述べる。そして彼はそれぞれ置かれた異なる環境（ここには、能力、気質なども含まれよう）を「運命」と言い表し、それと向き合って、歩めと語る。「運命は、これを拒み、そのまえに立ちはだかつて、文句をいっているあいだは、まことに索漠としたものにすぎないのです。運命は、これを愛することによって、はじめて澁刺としたものになるのです」（同書）と。

谷はこうした「教育観」の下で、少年たちと一緒に北海道家庭学校で生活していた。少年たちは午前中、礼拝、小・中学校の教科を学び、午後は、酪農、果樹園芸、山林、土木、蔬菜、工作などに分れ、労働に精を出して、汗を流す。初代校長の留岡以来、北海道家庭学校には、労作によって汗を流す尊さ、汗を流すことによって人間は大きく変わるとの「信念（＝「汗の教訓」、「流汗悟道」）」

を重んじてきた(『留岡幸助著作集』第3巻, 1979年)。それは少年たちが労作に取り組み、家畜の世話や木々、花々、野菜などの生育に汗を流す中で、父親・母親や周りの人々の労苦・配慮に気づかされ、伸びゆくいのちの素晴らしさと、また、いのちのはかなさを知らされてゆくからである(谷昌恒著『森のチャペルに集う子ら』日本基督教団出版局, 1993年)。

こうした日々を送る谷は若き日を振り返り、敗戦後、戦災孤児と一緒に福島県の堀川愛生園で擲んだ自らの教育活動に対する覚悟を以下のように表白する。

私の仕事は社会改革の仕事でも、世直しの仕事でもありません。小さな仕事です。(中略) 焼け石に水でもいいではないか。現に、そこに火傷を負った子どもがいるならば、その子の手当てをし、焼け石に水をかけなければならない。焼け石に水、それ以上でも以下でもない。それを自分の任としよう。そう思った時、私のすべての力みがとれました。気負ってはいは、長い歳月に耐えられない。静かな情熱。いつとき激しく燃え上がって、やがて冷めてしまうような熱に浮かされたものではなく、深く静かに燃え続ける情熱を支えとして仕事をしたい(谷昌恒著『教育力の原点』)。

「魂の育み、いのちの成長」を見守り、助力する仕事は地道で、しかも、人々から賞賛されることなどとは縁遠い、陰にあって、日々努力を積み重ねるものであることを教えられ、そしてかかる心有的教育者一人ひとりの教育実践がいかに必要かつ重要であるかも痛みを覚えつつ、知らされる。

3. 人間からの応答 —終わりにかえて—

広大な自然に囲まれた処で展開される北海道家庭学校。陽があたろうと、あたるまいと関わりなく、献身的に地道に教育活動を展開する人々の姿。それは近・現代が推し進めてきた諸政策、「豊かな物質生活、快適で、便利で、効率のよい生活環境、平均寿命の伸長」などとは一面、そぐわない光景を表わしている。なぜなのか。私たちはそこでなされている、「いのち尊重、魂の育み、人格教育の追求」などについて真剣に考え、深め、展開することを知らず、知らずのうちにそれらを「疎か」にし、「脇」へと追いやってきたからであろう。表面的に豊かで、「輝かしい」近代化の背後に、自然環境が徐々に破壊され、海や山や河や草原からいのちが一つ、また、一つ、消えてゆく現実がある。

「いのち、魂」を考察するに際して、そのことを深く見つめ、その有す意義を説き、伝えるものに宗教がある。古より、多くの聖人、賢人と言われた人々が宗教を通して「いのち、魂」のことなどを考え、祈り、「いのちの尊さ、魂の育み、人格の尊重」などを説き、その地域の死生観・人間観・世界観などを築いて、その地域の「精神・倫理」を形成していた。

その宗教の一つにキリスト教がある。そしてこのキリスト教の正典(Canon)である聖書にも「いの

ち・魂の尊重」「価値ある生き方、生きる意味」などについて触れた箇所はいくつもある。

その代表的な箇所として、旧約聖書の創世記 1～2 章がある。雄大な「天地創造」を描くこの箇所は、草木、鳥、虫、魚、動物、人間などあらゆるいのちは神によって祝福されて、創造されたと記す。すなわち、人間と「その他の存在」は「神からいのちを与えられた」という点で同一である。ただ、そこに相違があるとすれば、人間のみが「神にかたどって創造された存在 (imago Dei)」(創世記 1:27)、つまり、人間は神に似て、利他愛に富み、正義を行い、環境・秩序を配慮して守り、育てる「独立・自由」なる存在である、と言う。それ故、創世記 1:27 の人間が「その他のいのち＝自然の内にあるいのち」を「支配する権利」を神から付与されたと伝える記事は、人間がその「権利」を乱用して、「自然」を人間の食欲の犠牲としたり、それらを乱りに征服することを勧めるものではなく、ここに記された「支配する権利」とは自然の内にあるいのち(＝人間以外のいのち)の「保護・管理・育成」を神から人間に託され、それを担う責任が人間にあるのだと説いている(宮田光雄著『いま日本人であること』岩波書店、1985年)。

このように、被造物の中で特別な位置を与えられた人間は「その他のいのち」を守り、育てる責任が課せられ、そしてその責任は人間である男女それぞれにある、と言う。創世記 1:27 は「神の像 (imago Dei)」を男女双方に与え(男女同権、男女同等)、両性の協力・互助をも語っている。

「自然の内にあるいのち」と人間、男と女、我と汝などを強く結びつけ、相互に育みあう根拠は「神から祝福されて、いのちを与えられた」との一事によるものである。そしてこの立場から新約聖書中のマタイによる福音書 5:43～48 やマルコによる福音書 12:28～33 を読むと、それらは余り違和感なく理解することができるであろう。

はじめに、マタイによる福音書 5:43～48 は私たちが実践するにも、素直に納得するのの中々難しい箇所である。ここでは神は「善人」にも、「悪人」にも「太陽を昇らせ」、「正しい者」にも、「正しくない者」にも「雨を降らせ」との広大無辺な神の愛が説かれる。これは「因果応報」的な見方からすれば、あるいは、自己を「善人」、「正しい者」と見なしつづけて、他者を裁こうとするならば、不当・不公平の謗りをまぬがれることはできないであろう。しかし、他方、「神から祝福されていのちを与えられた」被造物(＝人間)への神の無条件の人間肯定よりすれば、人間は「完全無欠の絶対者」だとの傲岸は打ち砕かれ、また、「善人」、「悪人」などを区別する人間の価値基準は「無謬なるもの」だということも撤回しなければならなくなる。つまり、これは欠陥にまみれ、罪・悪をひそませ、有限性、相対性のうちにある被造物人間もまた、「祝福されたいのちを与えられた」存在であり、しかも、この世で果たすべき役割を有し、豊かな可能性を備えて、価値ある生き方を模索しえる存在であることをも指し示すものである。

こうした神の無条件の人間肯定はマルコによる福音書 12:28～33 の「人間からのすさまじい応答・責任 (Verantwortlichkeit)」となって表れざるをえない。そしてこの「すさまじい応答・責任」の具現化は本来、弱さと憎悪を有す人間にとって困難を覚えるものであるけれども、神の無条件の愛と赦しはその困難を越えて、憎悪を徐々に愛に変え、神への信頼を強めさせ、自己のこの世で果たすべ

き役割の探求とその役割の実践へと赴かせることも認めざるをえない（荒井献著『問いかけるイエス』NHK出版、1994年）。

旧約聖書の詩人はこのことを以下のように表現する。

主はわたしを青草の原に休ませ/憩いの水のほとりに伴い/魂を生き返らせてくださる。/主は御名にふさわしく/わたしを正しい道に導かれる。/死の陰の谷を行くときも/わたしは災いを恐れない。/あなたがわたしと共にいてくださる。/あなたの鞭、あなたの杖/それがわたしを力づける（詩編 23:2~4）。

ここには、神への絶大な信頼が表されている。詩人は絶望・苦難（＝「死の陰の谷」）の下で、自らの誕生を呪い、自らの人生の悲慘を嘆いたのだろうが、その絶望の只中にこの「いのちを祝福してくれた」神がその絶望とともに担い、絶望の果ての死をも殲滅する救いへと神がともに歩んでいることを知らされた（Fretheim, Terence E. *The Suffering of God*. Philadelphia: Fortress Press, 1984.）。詩人のこの静謐は「祝福していのちを与えた」神への深い信頼と意味あってこの世にいのちを与えられたのだとの確信によるものだろう。

「神の像」である人間、神に無条件に肯定された人間との認識は我以外の「他のいのち」に対する畏敬と尊重、今を、ここをともに生きる存在との心開かれた愛の連帯、また、未来のいのちに対する責任をも私たちに鋭く問うてくる。そしてそれとともに、これは私たちがより一層「人間らしく、すなわち、「神の像」として」生きることのできる自然・社会環境づくりに参与することの意義と喜びをも教えてくれる（宮田光雄著『いま日本人であること』）。

いのちの尊重、他者との愛に基づく共生、また、いのちを与えられた者の豊かな可能性への信頼は聖書が私たちに強く語りかけるとともに、今、私たちが個人として、家庭において、社会の中で、それらについて深く考え、具現化しなければならない事態に立ち至っていることにも気づかされる。そして一つ、一つのいのちが尊ばれ、大事にされる気運づくりに参与することを促される。そしてこのことは明日を担う人たちと交わりつづける教育者一人びとりに強く求められることである。